

中学生版 精神健康調査票 JHQ-12 の作成

横浜国立大学大学院 教育学研究科 井 上 果 子

Junior High School Adolescents' 12-item Health Questionnaire Scale (JHQ-12)

中学生版 精神健康調査票 JHQ-12の作成

Junior High School Adolescents' 12-item Health Questionnaire Scale (JHQ-12)

井上 果子

はじめに

本研究はGeneral Health Questionnaire（以下GHQと略す）を基にして、中学生の精神的健康を測る新たな尺度の作成を目的として質問紙調査を行う。GHQは一般健康調査質問紙法と訳され（中川・大坊, 1981）、イギリスMaudsley精神医学研究所のGoldberg（1972）、Goldberg, et.al.（1978）によって開発された神経症及び抑うつ傾向のクライアントの発見、症状の把握、査定や評価を目的とした質問紙尺度である。また、内因性のうつ病や統合失調症の発見にも有効とされている（中川・大坊, 1985）。Goldbergは最初に60項目で構成されたGHQ-60を作成し、その後短縮版として、GHQ-30, GHQ-28, GHQ-20, GHQ-12と複数のバージョンを検討していった。GHQはこれまで38ヶ国語に訳されており、その信頼性や妥当性は検証されている（Jackson, 2007）。

日本語版GHQは「精神健康調査票」とも訳され、標準化されている（中川・大坊, 1985）。しかし、標準化されているのはGHQ-60のみである。

臨床場面で多く活用されているGHQ-28は、「身体的症状因子」「不安・不眠因子」「社会的活動障害因子」「うつ傾向因子」という4因子構造で各7項目からなり、4件法で回答を求めている。集計時には4件法の内容を0-0-1-1として採点するGHQ採点法と、0-1-2-3と採点するリッカート採点法とが用いられている。

最も簡便化されたGHQ-12はGHQ-28との比較が行われ、WHOの精神障害における研究でその

妥当性が検証された（Goldberg, et. al., 1997）。GHQ-12はスクリーニングツールとして精神的健康を測定するには有効であることが証明されている。性差、年齢、学歴、国別においても、有意な差が見られず、妥当性が認められている。GHQ-12の得点が3以上の場合には、精神的健康が損なわれている可能性があるかと判定される（Jackson, 2007）。

ただGHQは16歳以上の対象に実施することが推奨されている。中川・大坊（1981）が日本語版作成時に実施した調査でも、正常者群55名の内10歳～19歳の対象者は4名であり、神経症者群80例の内10歳～19歳は6例であった。その後、彼らは大学生を対象に調査を実施している（中川・大坊, 1981）。

Goldberg, et.al.（1997）はGHQを16歳以下に実施することはすすめておらず、一般的に16歳以下が回答した結果の妥当性は疑わしいとされている。そのような見解の中で、オーストラリア（French & Tait, 2004）では11歳～15歳の男女に、スペイン（Padron, et. al., 2011）では平均年齢16.3歳の男女に、それぞれGHQ-12が実施されている。その結果、両研究とも16歳以下の回答者も成人と同様に反応すると報告しており、尺度として使用するように提案している。

本研究の開始時点で、筆者は日本においてもGHQ-12を中学生に実施するために、学校現場関係者や心理学の研究者と検討を重ねた。その結果、従来のGHQ-12の中には、中学生には馴染まない項目があることが判明した。例えば「いつもストレスを感じたことが・・・」や「いつもより

気が重くて、憂うつになることは・・・」といった項目は中学生に対して、抽象的すぎて、より具体的な項目内容が望ましいと判断された。また、4件法の選択肢が項目毎に異なるため、生徒によっては回答時に混乱を招き、大規模調査での実施は結果の信頼性に欠けると指摘された。そこで GHQ-12 に替わる中学生向けの簡便な精神健康調査票を作成することとした。

本研究の目的は、従来の成人用 GHQ-12 (Goldberg, 1972; 中川・大坊, 1981) を踏まえて (表 1)、中学生に馴染む文言に変更し、学校関係者から実施を承諾されやすい尺度項目になるように工夫し、選択肢も同一にした「中学生版精神健康調査票 (Junior High School Adolescents' Health Questionnaire-12 (以下 JHQ-12))」を新たに作成し、この尺度の妥当性を検証することである。妥当性の検討に当たっては大学生 (第 1 調査) と中

学 3 年生 (第 2 調査) に GHQ-12 と新尺度 (JHQ-12) を実施する。

方法

1. JHQ-12 の作成：

学校長と中学校教員計 2 名、及び心理学者 2 名で項目を検討した。日本語版 GHQ-12 (本田・柴田・中根, 2001) になるべく類似した内容となるよう心がけながらも、英語の GHQ-12 (Goldberg & Williams, 1988) の意味も汲み取って、わかりやすい項目の選定にあたった。最終的に表 2 に示す 12 項目 (JHQ-12) を確定した。英語版 GHQ-12 を表 3 に示す。

2. 調査期間：2011 年 2 月～2011 年 10 月

3. 質問紙の構成：

- ①フェイスシート：年齢、性別 ②GHQ-12 (表 1) ③JHQ-12 (表 2)。

表 1 精神健康調査票 General Health Questionnaire-12 (GHQ-12) 尺度項目

<注：漢字にはルビを振る>

1. 何かをする時にいつもより集中して・・・			
①できた	②いつもと変わらなかった	③いつもよりできなかった	④全くできなかった
2. 心配ごとがあって、よく眠れないようなことは・・・			
①全くなかった	②あまりなかった	③あった	④たびたびあった
3. いつもより自分のしていることに生きがいを感じる事が・・・			
①あった	②いつもと変わらなかった	③なかった	④全くなかった
4. いつもより容易に物ごとを決めることが・・・			
①できた	②いつもと変わらなかった	③いつもよりできなかった	④全くできなかった
5. いつもストレスを感じたことが・・・			
①全くなかった	②あまりなかった	③あった	④たびたびあった
6. 問題を解決できなくて困ったことが・・・			
①全くなかった	②あまりなかった	③あった	④たびたびあった
7. いつもより問題があったときに積極的に解決しようとする事が・・・			
①できた	②いつもと変わらなかった	③できなかった	④全くできなかった
8. いつもより気が重くて、憂うつになることは・・・			
①全くなかった	②いつもと変わらなかった	③あった	④たびたびあった
9. 自信を失ったことが・・・			
①全くなかった	②あまりなかった	③あった	④たびたびあった
10. 自分は役に立たない人間だと考えたことは・・・			
①全くなかった	②あまりなかった	③あった	④たびたびあった
11. 一般的にみて、しあわせといつもより感じることは・・・			
①たびたびあった	②あった	③なかった	④全くなかった
12. いつもより日常生活を楽しく送ることが・・・			
①できた	②いつもと変わらなかった	③できなかった	④全くできなかった

表2 中学生版精神健康調査票 Junior High School Health Questionnaire-12

(JHQ-12)尺度項目

<注：漢字にはルビを振る>

1. 心配事のために睡眠時間が減ったことがありますか	7. いろんな問題を解決できると思いますか
2. いつも緊張していますか	8. 全体的にまあ満足していますか
3. ものごとに集中できますか	9. 日常生活を楽しむことができますか
4. 何か役に立っていると思いますか	10. 不幸せで憂うつと感じますか
5. 自分の問題に立ち向かうことができますか	11. 自信をなくしますか
6. ものごとについて決断できると思いますか	12. 自分は役に立たない人間だと感じることがありますか

4件法 <1.いいえ；2.少しいいえ；3.少しはい；4.はい>

表3 General Health Questionnaire-12

2. Lost much sleep over worry	6. Felt you couldn't overcome your difficulties
5. Felt constantly under strain	12. Been feeling reasonably happy, all things
1. Been able to concentrate on whatever you are doing	7. Been able to enjoy your normal day to day activities
3. Felt that you are playing a useful part in things	9. Been feeling unhappy and depressed
8. Been able to face up to your problems	10. Been losing confidence in yourself
4. Felt capable of making decisions about things	11. Been thinking of yourself as a worthless person

4. 調査回答者：

第1調査回答者：大学生（有効回答者）212名（男性104名、女性105名、不明3名）。

年齢は19歳～23歳（平均20.62歳）。

第2調査回答者：中学3年生（有効回答者）257名（男子129名、女子127名、不明1名）。

年齢は14歳～15歳（平均14.67歳）。

5. 調査手続き：

大学生への実施は、授業担当者の協力や同意を得た。調査実施は授業終了10分前に一斉配付し、無記名個別記入式で実施した。調査者は筆者である。大学生には調査の目的を説明し、同意を得た者のみに実施された。

中学生への実施には、Y市内の公立中学校の学校長と7クラスの担任の協力や同意を得た。調査実施は授業時間中にクラスごとに一斉配布し、無記名個別記入式で個別封入し、クラスごとに回収した。調査者は、クラス担任である。中学生回答者には調査目的を説明し、同意を得た者のみに実施された。

なお、大学生及び中学生の両対象者に、この調

査は「一つの尺度の作成のために協力を依頼している」旨を伝えてあった。

結果

GHQ-12およびJHQ-12の両尺度とも、採点はGHQ方式（0-0-1-1得点）を採用した。健康上の問題がないと考えられる2つの選択肢を0点、健康上の問題があると考えられる残りの2つの選択肢を1点として全項目の合計得点を算出した（GHQ-12は0点～12点まで分布する）。両尺度とも、得点が高いほど精神的健康が損なわれていることを意味する。

大学生を対象にした第1調査では、GHQ-12及びJHQ-12の両尺度に、高い尺度間相関が得られた（ $r=.67^{***}$, $p<.001$ ）、対応のある t 検定の結果、有意傾向の差が見られ（ $p<.07$ ）、GHQ-12に比べJHQ-12の平均がやや低かった（表4）。

表4 大学生におけるJHQ-12とGHQ-12の対応のあるt検定の結果 (GHQ法)

大学生	N	M	SD	r	t(df)
JHQ-12	207	3.73	2.90	.671***	-1.853 †
GHQ-12	207	4.06	3.31		(206)

† $p < .10$

中学生を対象にした、GHQ-12の12項目4件法、及びJHQ-12の12項目4件法のそれぞれについてGHQ法による尺度得点を、主成分分析によって解析した。GHQ-12の解析の結果、第1主成分の負荷量の絶対値は.425以上あり、寄与率は34.5%であった。GHQ-12の α 係数は.805であった。JHQ-12の解析の結果、第1主成分の負荷量の絶対値は10項目が.448以上であったが、2項目は.40を下回った。寄与率は33.9%でJHQ-12の α 係数は.749であった。従って、JHQ-12も1次元構造であることが確認された。

中学生を対象にした第2調査では、GHQ-12及びJHQ-12の両尺度に高い尺度間相関が得られた($r = .642^{***}$, $p < .001$)。性別・年齢別に相関係数を算出したが、いずれも.596~.686と高かった(表5)。また、対応のあるt検定の結果、有意な差が見られ($p < .001$)、GHQ-12に比べてJHQ-12の平均値が高かった(表6)。JHQ-12とGHQ-12について1点以下を低群、2~3点を中群、4点以上を高群と規定し、「低群・中群」と「高群」の対応のある比率の差の検定を行ったところ(表7)、1%水準で有意な差が見られた(マクニマー検定, $\chi^2 = 23.672$, $df = 1$, $p < .001$)。また、2点以下を「低群」、3点以上を「高群」として、対応のある比率の差の検定を行ったところ(表8)、1%水準で有意な差が見られた(マクニマー検定, $\chi^2 = 12.569$, $df = 1$, $p < .001$)。JHQ-12はGHQ-12より高群が多かった。

表5 中学生におけるGHQ法(O-O-1-1)得点化による相関係数

相関係数	GHQ-12				
	全体	男性	女性	14歳	15歳
JHQ-12	.642***	.596***	.686***	.632***	.648***
n	257	129	127	85	171

*** $p < 0.01$

表6 中学生におけるJHQ-12とGHQ-12の対応のあるt検定の結果 (GHQ法)

中学生	N	M	SD	r	t(df)
JHQ-12	257	4.71	2.50	.642***	7.534***
GHQ-12	257	3.62	2.93		(256)

*** $p < .001$

表7 中学生におけるJHQ-12とGHQ-12のクロス集計(GHQ法)

度数	GHQ		合計
	低・中群	高群	
JHQ			
低・中群	82	11	93
高群	50	114	164
合計	132	125	257

対応のある比率の差の検定(マクニマー検定) 結果
 $\chi^2 = 23.672$, $df = 1$, $p < .001$

表8 中学生におけるJHQ-12とGHQ-12のクロス集計(GHQ法)

度数	GHQ		合計
	低群	高群	
JHQ			
低群	49	15	84
高群	43	130	173
合計	112	145	257

対応のある比率の差の検定(マクニマー検定) 結果
 $\chi^2 = 12.569$, $df = 1$, $p < .001$

考察

JHQ-12はGHQ-12と高い相関を有しており、GHQ-12と同じ属性を測定しているものと判断される。ただし、中学生(第2調査)においてはJHQ-12の方がGHQ-12よりも平均値が高かった。この相違が生じた原因はGHQ-12の選択肢にあると考えられる。すなわち、JHQ-12では極端な選

択肢を避けているため、平均値が上がったものと考えられる。さらにGHQ-12には「いつもストレスを感じたことが・・・」や「いつもより気が重くて、憂うつになることは・・・」など中学生になじまない、不健康を示す項目が加わっているために、これらを「いつも緊張していますか」や「不幸せで憂うつと感じますか」といった内容に替えたことも平均値が上がった原因と推測される。

中学生を対象にした際にはJHQ-12はGHQ-12の代わりに使用することができ、さらに鋭敏な尺度となっていると評価される。

文献

- French, D. J. & Tait, R. J. (2004) Measurement invariance in the General Health Questionnaire-12 in young Australian adolescents. European Child & Adolescent Psychiatry, Vol.13 (1), pp. 1-7.
- Goldberg, D. P. (1972) The detection of psychiatric illness by questionnaire. Maudsley Monographs, 21. London, Oxford University Press. (訳 中川泰彬 (1981) 第1部 質問紙による精神疾患の発見—精神・神経症状の診断法および評価法—, 「質問紙法による精神・神経症状の把握の理論と臨床応用」 中川泰彬 (訳著編)、国立精神衛生研究所モノグラフ、1-109頁)
- Goldberg, D. P., et al. (1978) Manual of the General Health Questionnaire. NFER Publishing.
- Goldberg, D. P., Gater, R., Sartorius, N., Ustun, T. B., Piccinelli, M., Gureje, O. & Rutter, C. (1997) The validity of two versions of the GHQ in the WHO study of mental illness in general health care. Psychological Medicine, Vol.27 (1), pp. 191-197.
- Goldberg, D. P. & Williams, P. (1988) A users guide to the General Health Questionnaire. NFER Nelson.
- 本田純久・柴田義貞・中根允文 (2001) GHQ-12項目質問紙を用いた精神医学的障害のスクリーニング 厚生省の指標、第48巻、第10号、5-10頁
- Jackson, C. (2007) The General Health Questionnaire. Occupational Medicine, Vol.57, p.79.
- 中川泰彬・大坊郁夫 (1981) 第2部 日本版一般健康調査質問紙法の妥当性と信頼性の検討とこの質問紙法の臨床応用、「質問紙法による精神・神経症状の把握の理論と臨床応用」中川泰彬 (訳著編)、国立精神衛生研究所モノグラフ、110-197頁
- 中川泰彬・大坊郁夫 (1985) 日本版GHQ精神健康調査票手引 日本文化科学社
- Padron, A., Galan, I., Durban, M., Gandarillas, A., & Rodriguez-Artalejo, F. (2011) Confirmatory factor analysis of the General Health Questionnaire (GHQ-12) in Spanish adolescents. Quality of Life Research, pp.1-8.